

第6章

ラテンアメリカ諸国の日系人と その子どもにとっての在日経験の意義

中 川 文 雄

ラテンアメリカ諸国の日系人とその子どもにとっての 在日経験の意義

城西国際大学

中川文雄

1. 訪問家庭でのインタビューの特徴と問題点

ブラジル、ペルーをはじめとするラテンアメリカ諸国から来日し、在住したあと、再度帰国した日系人とその子供たちは、2つの異なった言語と学校文化の間を往復し、また、2つの異なった価値観を有する社会の間を往復した。その子供たちの学力、言語能力、態度、モラルを追求し、彼らが往復した社会への適応、不適応の状況を比較研究するのが、この国際学術研究の最大の目的である。

(1) インタビューした家庭の生活状態

そうした目的に沿って、筆者は1998年8～9月と1999年8～9月の2回にわたって、ペルーのリマ大都市圏、ブラジルのロンドリーナ、クリチーバ、サンパウロ大都市圏、リオ・デ・ジャネイロ大都市圏、ブラジリア連邦区とそれらの周辺農村部で、在日出稼ぎ経験のある43の日系家庭を訪問し、子供たちとその親たちにインタビューを行い、それをアンケートで補う形で調査を行った。また、それとは別に6人の十代後半の子供たちに家庭の外でインタビューを行った。ほとんどの家庭には2年間で2度の訪問を行ったが、日本に再度出稼ぎに出かけた家庭、強盗に押し入れられ、それが原因で転居した家庭など、2年目に会うことが出来なかった場合も幾つかある。これは、筆者ではなく、共同研究者の田嶋がリマでインタビューした家庭では、その後で、その主婦が強盗に押し入れられ、殺害されたという例もある。

日本へ出稼ぎに行った人たちの帰国後の生活状態、経済状態に関しては、関係者の観察は必ずしも一致していない。サンパウロにある国外就労者情報援護センター(CIATE)が1999年6～12月に行ったアンケート調査では、回答を寄せた793人の帰国者の中、38%が失業中であり、50%が無収入となっている¹⁾。回答を寄せた人たちの34%が女性であり、そのかなりの部分が専業主婦に、すなわち、家庭内の無償労働にもどったことを考慮に入れても、そこに示されているのは、厳しい状況である。筆者が訪問した日系二世の家庭では、元高校教師の夫は、帰国後、職が見つからず、日本で貯めた資金で買った3つのアパートの中2つで借家人が家賃を払わず、結局、夫の親の家業の手伝いで細々と生活しているが、その他にも類似例を見ることがかなりあった。最初の例では子供の一人が、日本ではうまくいっていたのに、こんな状態になるなら、なぜ帰国したのかと、父親の判断の悪さを公然と非難する局面も見られた。

しかし、他方では、帰国者の経済生活の明るい側面について語る人もいる。筆者がインタビューで訪問した家庭は、後述するように、平均よりも恵まれ、出稼ぎ経験をプラスに転化した人の割合が平均よりも高いと見られるが、インタビュー家庭のかなりの割合は、日本での蓄積をもとに、家を新築し(プール付きの素晴らしい家もある)、あるいは、アパートなどの不動産、店舗、農場、機械類を購入し、新規の企業を起こすなど、出稼ぎは経済的な成功をもたらしたとの印象と羨望を周囲の人間に与えている。その結果が往々にして、強盗の押し入りや誘拐を招くことになる。しかし、そのことは決して日本から帰国した出稼ぎのひとたちが、常に戦々恐々としていることを意味するものではない。実際には、ゆったりとリラッ

クスした生活をしている人たちが大半であるように思われる。しかし、上記のような事件が起きた場合には、それへの対応は激しいものにならざるを得ない。

(2) インタビューの方法をめぐるの問題点

筆者が行った43家庭でのインタビューに関して、方法論的に、次の点を考慮する必要があるかと思われる。その一点は、インタビューとアンケートの標本抽出に関してである。筆者が在日出稼ぎ経験帰国者の家庭に到達し得たのは、北パラナ地域教育庁（ロンドリーナ）、出稼ぎ支援協会（クリチーバ）などの公的な機関や民間ボランティア団体、あるいは、北原聡美さん（リオ・デ・ジャネイロ州立大学）、ルジア・ヤマシタ・デリベラドルさん（ロンドリーナ州立大学）らの個人の紹介によるものであった。これらの機関、団体、個人らの助力で、本来、筆者ひとりではどうも到達不可能の人たちに加え、インタビュー出来たのであるが、その結果として、インタビューの対象が、上記の機関、団体、個人に肯定的に反応する人たち、すなわち、どちらかといえば、日本での出稼ぎ体験を肯定的に見ている人たちに偏っていた可能性があることは否定できない。上記の機関、団体、個人が打診した際に、インタビューを断った例は3件であった。また、上記の機関、団体、個人を通じて配布依頼したアンケートに回答しなかった人の割合は40%である。インタビューを断った人、アンケートに回答しなかった人の理由としては、(1)日本での経験を語りたくない、思い出したくない、(2)帰国後の、また、日本での仕事の内容、経済状態、家庭内の状況を知らせたくない、といったことが考えられる。

インタビューで、どこまで本当のことを話してくれているのか、どこまで、相手の本当の気持ちを引きだし得たかについては、常に疑問が残った。しかし、相手の心をできるだけ開いてもらうよう、相手に質問するのと同じ時間を筆者の身元や、相手との共通点について話すことに割いた。筆者にはアルゼンチンに親戚がいること、自分もガイジンと結婚していること、子供の問題など、相手に応じて、そうしたことを話すことで、少しでも共通の場を見いだそうとした。日系人の出稼ぎ経験者家庭へのインタビューで相手の心を開かせ、本当の気持ちを引き出すことについては、北原聡美がその博士論文で興味ある記述を行っている。²⁾

2. インタビューから派生した新たな課題

43の家庭での親と子供、さらには祖父母を含めることもあるインタビューでは多様なテーマについて話し合った。そこでは、本来の調査テーマ、質問項目である、(1)子供の学力と学校での態度、モラル、(2)学校の管理・運営が子供に及ぼす影響、(3)子供の言語能力、(4)家庭や地域社会での子供の態度とモラル、(5)家庭の教育経験と教育観、(6)日本の学校文化が帰国した子供に与えた影響、だけでなく、むしろ、そこからはみ出したテーマについて話すことが多かった。その中から、それぞれの家庭での人生設計あるいは社会上昇戦略の中で教育はどのように位置づけられているのか、自国と日本の間を往復した親と子供たちは二言語・二文化にどのように対応しているのか、外国へ出稼ぎに行くことは女性にとっての自由と自立の獲得とどのように関連するのか、出稼ぎ人口の中で比率を高めつつある非日系人（日系人となんらかの姻戚関係にある）と混血者（日系人と非日系人との間の）の存在はブラジルやペルーでの今後の日本語や日本的文化伝統の継承とどのように関連するのか、等等重要な課題が浮かび上がった。

こうした多くの課題の中から、筆者は次の4つの事象を取り上げたい。それは本来の調査テーマから、やや、はみ出しているものの、本調査の対象である日系人と移動を包括的にとらえるために、ぜひ、必要と思われるからである。上記の(1)～(6)の本来の調査テーマに対する詳細なインタビュー調査結果については本報告書の中の江原論文、田島論文、山脇論文を見ていただきたい。筆者が本論文で取り上げる4つ

の事象とは、その重要さと無関係に順序不同に挙げると、(1)人生設計あるいは社会上昇ストラテジーの中での教育の位置づけ、(2)空間的な移動と女性にとっての解放感、自立感達成の関連、(3)出稼ぎ人口の中での非日系人・混血者の増大とその人たちの在日経験評価、(4)日系人にとっての二言語・二文化状況への対応の問題、である。

この中、(1)から(3)については、第3節～第5節で、極めて断片的であるが、観察したことを述べてみたい。(4)については、筆者が1990年、1992年、1993年にバングラデシュ、ボリビア、ブラジル、アルゼンチンで行った調査と比較しつつ、第6節で簡単に紹介したい。筆者が1990～92年時に主として南米集団移住地でインタビューした日系人とその子供と、1998～99年時にインタビューした、より都市化し、混血化し、かつ、在日経験を有する日系人とその子供との間には、日本語や日本文化に対する、また、二言語・二文化に対する考えと態度に大きな違いが認められる。前者では、日本語と日本文化の継承は、日系人としてのアイデンティティの核として求められ、そこには、自ずから理想化された日本像が存在するようになっていた。また、日本語と日本文化の継承と、現地の学校と社会の中での卓越の双方をいかに実現するか、あるいは、どちらかに重点を置くかは、親と子供の双方にとって、将来の生活設計との関連で真剣に考えられ、悩む問題であった。これに比べると、1998～99年時にインタビューした在日経験者の場合、実際に住んだ日本の言語と文化として、現実的な眼で坦々ととらえられているように見える。なお、(4)に関連して、本報告書のヤギ・アカミネ論文が、ペルーの日系人の子供に関する興味ある観察を示している。

3. 空間的な移動と女性にとっての解放感、自立感

(1) 外国への移動は自国での拘束から女性を解放する

出稼ぎ労働者や移民労働者の悲惨な状況が世界各国に関して報じられている。それらの多くは事実であるし、確かに、自分の本来の生活の場から切り離されて、外国で生き残って行くためには、屈辱的な条件を受け入れざるを得ないことが多いし、その滞在資格が不合法な場合、搾取は一層激しいものになる。しかし、他方では、出稼ぎや移住が所得増大と経済的機会の拡大をもたらし、さらに、自国にいた時に受けていた様々な拘束から、その人間を解き放つ可能性を有していることは否定できない。

特に女性の場合、外国に働きに出ることで自国で自分を縛っていた様々な拘束（その多くは外国に住んだ後で初めて気づく類の拘束）から解放され、さらに、移り住んだ国で本来その国の女性に期待されている役割や行動パターンからも自分が外国人であるが故に自由であるという、二重の意味での解放感と自由を味わえる可能性がある。インタビューに応じてくれた女性の出稼ぎ経験者の相当な割合が、日本への出稼ぎはそれまでになかった自由と自立を自分に与えたと述べている。その人たちの殆どが純日系人であり、日本的な伝統が比較的保たれている家庭の人たちである。

出稼ぎに行き、かなりの高賃金で自前で金を稼ぐことによって、それまでの自国での家庭内の無償労働や家庭外の低賃金労働から解放されたり、あるいは、複数世代が同居する家庭での家事の重荷から解放され、それまでになかった自由と自立を感じたとその人たちは述べている。そうした自由を得たことと、また、それまで自国の親戚や知人の前で経済的に劣等であった自分が日本で厳しい条件の下で働き、金を蓄めることによって経済的に対等になった、自分は、やはり価値ある人間なのだとの自己の再発見をしたことなど、在日経験の積極的意義を喜々として、筆者に語った女性もいる。もちろん、この人たちの場合も、賃金差別をうけたり、日本人の男が逃げ出すようなキツイ仕事を長期間続けざるを得なかったなど、その就労条件は決して恵まれたものではない。しかし、彼女らが自国にいた時になかった自由と自立を感じたことは事実であり、今、彼女らは自国に戻り、もとの家庭環境に戻って、家族との触れ合いの幸福を感じ

つつも、再び無償労働と家事の重荷を前にして複雑な気持ちでいるように思われる。

(2) ある出稼ぎ女性の自立感と在日経験評価

そうした中から一つの事例を挙げて見たい。それは、リオ・デ・ジャネイロ周辺で野菜・果樹栽培を営む農家の主婦のE・Mさんの例である。Eさんは1998年当時52歳の二世で高等教育はうけなかったが正確な日本語を話す。二世の夫と結婚して20年間を主婦業と農事労働に専念していたが、92年から97年まで日本に出稼ぎに行き、工場のアッセンブリー・ライン、病院の清掃、介護人兼ホームヘルパーの仕事をした。Eさんの家の近郊農業は利益が上がらず、借金が増えていくのを見て、一家の出稼ぎを決意したが、問題は誰が残るかであった。最初はEさんが残る予定であったが、結局、健康状態がよくない夫と高齢であるが健康な姑（夫の母）が残り、親戚の助けを借りて、家と畑を維持した。

Eさんと成人で大学生になっていた息子と娘と一緒に日本に行ったが、一年後に工場を離れてからは、Eさんは子供たちと別れて病院や介護関係の同僚たちと同じ寮に住んだ。初めての単身生活であったが、上司や同僚との関係もよく、孤独に苛まれることはなかった。日本にいる子供たちとは、頻繁に電話で話し、また、ブラジルに残した夫とも定期的に電話で話した。一家の経済状態を立て直すという目的意識に支えられ、夫や子供たちとの別離をそんなに異常なこととも、不幸なこととも思わなかった。そうした別離はいつまでも続くことではなく、やがて、自分はブラジルに帰るのだとの信念もそれを助けていた。子供たちが成長していて、大学生ではあるが、それ以前の学齢期になかったことは、Eさんの行動を、学期の子供を持つ同じ出稼ぎの女性たちよりも、はるかに自由にし、心配事を少なくしていた。

Eさんは、それまでに稼いだこともない高い賃金を得たことと、自分は役に立ち、人々から求められているのだと感ずるようになったことが、ブラジルで農家の主婦でいた時とは違った自信に充ちた自分をつくりだしたように思った。過去30年間でこれほど自由で、自分が自立した存在であることを感じたことはなかったとEさんは語っている。Eさんがいう自由の中には、夫と姑から離れて、その世話や夫と姑を絶えず気にするわずらわしさからの解放が含まれているに違いない。Eさん自身は、そのことを筆者に語ったわけではないが、北原聡美がインタビューした別の農家の主婦（一世、47歳）の次の言葉から察することができるように思われる。

「多くの女性が出稼ぎになることで解放を感じている。出稼ぎとして働くことは考えてみれば楽なことである。働いたら、その分だけ賃金がもらえるからだ。ブラジルにいる日本人は移民のうまくいった成功談ばかりを話したが。そんなのは、みんな嘘である。そんな話は、すべて男が作り出したものだ。先日、日本のテレビ番組がパラ州の日本人夫婦にインタビューしているのを見たが、レポーターが主婦に主婦としてどんな困難な問題がありましたかと尋ねるのに、主婦は何の困難も問題もなかった、家事をしているだけでよかったからと答えていたが、あれも嘘である。本当の事を話した女性たちは、後で大変な目にあっている。そんな目にあった友人の一人は日本に出稼ぎに行ってしまった。日本人移民が成功するとしても、それは常に女性たちの犠牲の上に成り立っているのだ。」³¹

北原は日本に出稼ぎに行った女性たちの在日経験への反応は多様であり、この主婦の例はあくまでその一つにすぎないとしているが、同時に、他の多くの女性にとって、出稼ぎとして日本で働くことは、経済的な自立をもたらすだけでなく、夫、舅、姑からの一連の要求から解放されることをも意味すると述べている。それは筆者がインタビューした純日系人女性の多くが語り、あるいは、間接的に示唆したことに一致する。

再びEさんのことに戻って、Eさんは97年にブラジルに帰国した。夫の健康状態がやや悪化したのと、一つの潮時と考えたからであった。Eさんはその後、夫とともに近郊農業に専念している。日本への出稼

ぎで貯めた金の一部は息子の貯金分と併せて家の増築に使われ、あとは、借金の返済と投資用のアパート購入に充てた。Eさんは折々、もう一度日本に行ってみたく思うことがある。しかし、ブラジルでの帰国後の状況に決して不満なのではない。息子は日本で知り合った日系三世の女性と結婚し、二人の間に子供も生まれ、今、息子一家は帰国して、Eさんが増築した家に住んでいる。家族を中心にした、この小さな幸福も一つの生き方であるし、日本で経験した自分の能力と可能性を試した人生も一つの生き方である。その双方を経験したことで自分は幸せであったとEさんは思っている。

(3) 国際移動とジェンダー関係

空間的移動、特に外国への移動とそこでの新しい仕事体験が女性に自由と自立感をもたらすことがあることは、出稼ぎ日系人女性の例だけでなく多くの国で、異なった民族的背景を持つ外国人労働者女性に関して報告されている。日本に住む韓国人ノンフィクション作家呉善花の「スカート」シリーズは、韓国で離婚した女性たちが強い偏見にさらされ、それを脱出して日本に移り、その多くは風俗産業関係の仕事につくが、その中であっても、実に生き生きとした精神状態を保ち、自由と自立を謳歌している様子が描かれている。そのことは決して日本社会が離婚した女性や外国人女性に対して寛容で偏見に乏しいことを意味しているのではなく、彼女たちが自分たちの過去を問題にする自国を去って別の国に移ったからこそ得られた自由なのである。同様のことは離婚その他の問題で偏見にさらされている日本人女性が外国に移ることで日本にいた時には得られなかった自由を感じる例が多いことにもあらわれている。

移動とジェンダー関係の関連について調査したオードリー・マクスウェルはインドから英国に移住した女性の次のような言葉を紹介している。「インドに住んでいた頃、私は自分には殆ど自由がなかったことに気が付いていなかった。街路でとる動作、どのような衣服を身にまとうか、話すのは大声か小声か、誰かの手を握っていいのかどうか、こんなことに関する自由も選択もなかった。今でもインドに帰ると、私は全身が締め付けられるような感覚になる。(中略) 一人の女性として、英国にいる時の私は、はるかに大きな権能を与えられた存在である。」⁴¹⁾

マクスウェルはさらに、移動と自由に関する今ひとつの側面を、そのインド人女性の証言から提示している。そのインド人女性が言うには、イギリス人男性の殆どは、英国にいる白人女性に対する期待感を自分に対しては抱いていない。その期待感には、服装やマナー、行動パターンに関する期待とともに、男性たちが白人女性に対しては、その身体を上から下まで眺めて細かく吟味するのに（そこに何かの期待感がある）、自分たち有色人女性に対してはそれを行わないという違いがある。それは、ある意味では、有色人女性に問題にされていない、疎外されていることの表れであるが、自分にとっては、白人女性が男性からの期待感によって受ける制約や拘束から自分は解放されている面の方を強く感ずる。自分は英国に居るが、自然に行動する自由があるし、そこにいる白人女性よりももっと自然に行動できる自由があるように感ずる。もちろん、インド人に対するステレオタイプと闘うための努力で必要以上に攻撃的にならざるを得ず、自然さを失うこともあるが、英国での自分は基本的に自然で自由に生きており、これは、何ものにもかえがたい大切なものである。移動が生み出す自由の、この第二の側面がどうだったかについては、純日系人よりも非日系人出稼ぎの人たちに関連することが多いと思われ、次の第4節で見ることにしたい。

4. 交婚家庭と混血の子供たちの在日経験と価値観

(1) 出稼ぎ人口の中での非日系人の増大

前節で純日系女性で日本の農村の家族形態を相当に残している家庭から日本に出稼ぎに行った女性たちを中心に移動と自由、自立の関係、在日経験への肯定的評価を見た。しかし、一般にあって、純日系人の

多くは、特に男性は、日本で自分が受けた処遇に満足しているわけでも、在日経験を肯定しているわけでもない。むしろ、同じ出稼ぎとして行った非日系の方が肯定度は高い。

注意すべきことは日本にいる出稼ぎのラテンアメリカ諸国の人たちは、それぞれの出身国別に純血日系人と非日系人・混血といった形で二分されているのではなく、純血日系人の間に、婚姻などで結び付いた非日系人がなんとなく入り込んでいる状態である。在日ペルー人の場合だけ、多少の二分状況があるかに見える。純血日系人も自分の親戚に非日系人と結婚しているものが相当数いるわけで、非日系人を疎外することはないし、非日系人も日系人を疎外することはない。ただし、個人としては純日系人と非日系人の間に在日経験の評価をめぐって、多少の違いが認められる。その違いは、純日系人どうしが夫婦になっている家庭と、日系人と非日系人が夫婦になっている交婚家庭の間にもあるように見える。

ラテンアメリカ諸国から日本に来ている出稼ぎ人口のかなりの部分は、自国と日本の間を何回も行き来する出稼ぎ繰り返しの人たちによって占められているが、当初多かった日本国籍を持つ人たちや自国で家庭内で日本語を使用する人たちの割合は近年著しく低下している。より若い世代で日本語をあまり話さない人たちの割合が増大し、さらに、この中に日系人と婚姻関係にある非日系のブラジル人、ペルー人が数多く加わっていることは、日本国内で出稼ぎの人たちが集まる町で観察されることである。

パラグアイ、ボリビアのように日系人が新たに婚姻を結ぶ場合、その相手に占める非日系人の割合が数%程度のところもあるが、ブラジル、ペルーでは、その比率ははるかに高くなる。⁵⁾ ブラジルで今日、日系人が新たに婚姻を結ぶ場合、その相手に占める非日系人の割合は46%に達しているとワキサカからは述べている。⁶⁾ 日系人の婚姻に関して、全国を網羅するデータは存在しないものの、ブラジル日系人を観察する人の多くは、ワキサカから挙げる数字が現実に近いことに同意するであろう。以下、本節で述べることはブラジルを対象にしており、節の最後でのみ、個人インタビューしたペルー人少年の在日経験とその評価に触れている。

(2) インタビューした非日系人の人種構成、価値観

筆者が1998年、99年に訪問した出稼ぎ経験家庭43の中、ほぼ半数に近い21が、日系人と非日系人が夫婦をなしている交婚家庭であった。その中、12が妻が日系人、夫が非日系人、9が夫が日系人、妻が非日系人であったが、さらに、その2つは夫の日系人自身がすでに混血であった。43の家庭の中、離婚には至っていないが事実上別居と思われるものが少なくとも4つあり、2年目に訪ねた時に、日本に行ったまま殆ど連絡のない法律上の夫に代わって、別の男性が事実上の夫の役割を果たしている例も1つあったが、上記の数字は法律上の妻と夫を数えたものである。

交婚家庭の比率が高いのは、彼らの出稼ぎ体験が日系人どうしの夫婦のそれよりも、満足度が高かったために、インタビューを受け入れる度合いが高かったこと、また、第1節で述べたように、筆者たちに紹介の労をとってくれた機関、団体、個人の依頼に対して、より積極的に対応したことに影響されている。そうではあるが、全般的に見ても今日、出稼ぎ経験者家庭の相当に高い割合が非日系人を内に抱え、子供は混血で日系・非日系双方の文化的背景をもち得る人たちであることを改めて指摘したい。

筆者が訪問した21の交婚家庭はすべてブラジルにおいてであったが、非日系人である夫ないし妻21人中、20人が白人であった。1人だけが、白人、黒人、先住民の血統を継いでいる感じの混血の女性であった。白人の比率が非常に高くなっているのは、日系人の側からの、非日系人を選ぶならば黒人系よりも白人系をという選択が働いたものと思われるが、それと同時に、その多くが中産階級を構成する日系人が付き合う非日系人とは、自分に近い経済水準にあり、生活倫理、職業倫理の点でも近いところがあるヨーロッパ移民の子孫の二世、三世、四世が中心になっていることに影響されている。筆者がインタビューした非

日系人の殆どがイタリア、ドイツ、ポーランド、ポルトガル移民の子孫であった。

このように、在日経験を有する非日系人を内に取り込んだ日系人家庭が多く存在し、そうした夫婦が、また、そこから生まれた混血の子供たちが、どのようなアイデンティティを持ち、また、日系社会との繋がりが、日本との繋がりをどのように意識しているかは、極めて重要な研究課題である。しかし、その研究ははじまったばかりとあってよく、北原らの研究の今後に期待したい。本論文のこの節では交婚家庭に焦点を当てて、彼らが在日経験をどのように見ているかを、限られたインタビューとアンケート調査に基づいて、暫定的に示すにとどめる。

(3) 純日系人と非日系人の在日経験評価と日本観

筆者たちはインタビューとアンケートを通じて、出稼ぎ経験家庭の親たちと子供の一部に、日本と日本人の良い点、悪い点、ブラジルにおいては、ブラジルとブラジル人の良い点、悪い点を尋ねてみた。その回答は多様だが、おおよその傾向として、日本、日本人の良い点として、安全、仕事への献身、社会的平等、子供の躾、などが挙げられ、悪い点として、冷たい、柔軟性がない、選択の余地がない、地位を問題にする、などと並んで、人種差別主義者 (racista) という回答がかなりある。racistaという回答をよせているのは、ほとんどが純日系人で、非日系人からのそうした回答はほとんどない。

筆者のインタビューした相手だけでなく、一般に、ブラジルからの出稼ぎ非日系人の大半は白人であり、彼らは日本の中で差別されることは少なかった。特に仕事の場での日本人上司との関係においてそうであり、上司と良好な関係を保ち、白人であるが故に有利な扱いを受けることもあり、彼らはそれを敏感に感じとっていたように思われる。純日系人の場合、そういう有利な扱いを受けることは少なかった。

日本人の多くが国内、国外で、他のアジア人や黒人を差別していることは事実であり、その差別は日系人にも向けられている。生物学的ルーツでは日本人と同じ日系人を、日本人としての文化や伝統を失った存在として見下す傾向があり、これが日系人にとっては、日本人のアジア人差別と同列の人種差別として映り、日本人を人種差別主義者の名で呼ぶことになる。

筆者がインタビューした非日系人の殆どは、先に述べたように、日本で良好な人間関係を保ち、上司に気に入られ、一か所に定着した人が多く、相当に大きな金をブラジルに持ち帰ったように見える。たいいていのが家を新築し、アパートなど不動産に投資している。新しく店舗を開いた人、企業を起こしそれが順調に拡大している人など、出稼ぎは経済的には大きな意味があった。日本にいる出稼ぎの人たちに、日本からブラジルに何を持ち帰りたいかと質問した際、最も多かったのが、技術、機械設備そのもの、労働のシステム、生産性、顧客への態度であったが、筆者が訪ねた交婚家庭では、この中のいくつかの要素が持ち帰られ、新しい仕事に利用されていた。

交婚家庭の非日系人はヨーロッパ移民の子孫が多いことを先に述べたが、そのこともあって、勤勉、計画性、教育の重視など本来、日系人の中で強調されていた価値は、非日系人にも共有されている、ないしは、むしろ非日系人がそれらを強調する場合もある。⁷⁾ 一方では、ヨーロッパ的な価値、個性の尊重や感情表現を非日系人の妻である日系人が重視している例もあった。こうした親の下で育った子供たちがどのような価値観を持つようになるのかは現段階ではまだわからない。しかし、子供たちに将来、何になりたいかと尋ねた時、コンピュータ技術者、医療技術者などの堅実な職種と並行して、女子では俳優、男子では歌手がいくつかあったのは、どのように解釈すべきなのであろうか。

(4) 混血の子供たちの自国での立場と在日経験

交婚家庭の子供たちは混血であるが、混血であること自体はブラジル社会の中では悩みの種になることは少ないように思われる。異なった背景を持つ父母から受ける2つの伝統をめぐって、子供がアイデンティティ

ティ確立期に悩むことも多くはないように思われる。父も母も所詮ブラジルの中で育っているのであり、多くの共通したもので繋がっているからである。子供の在日経験がアイデンティティを揺るがすことほどであろうか。純日系人の少年で、すばらしい在日経験をして、その後はブラジルがつまらなく見え、ブラジルに居ながら、日本に同一化しつづける例を見たが、交婚家庭の子供たちがその点でどうなのかを語るだけの深いインタビューはできなかった。混血の女子で両親が日本に出稼ぎに行き、親戚にあずけられ、ブラジルに残されたまま心理的な問題とそれから派生していると思われる身体的な問題で悩んでいる例を98年に見て、翌99年、再度訪ねた時は随分と良い方に変っていた。母親が帰ってきて、しかも、生き生きと幸せそうにしていることが影響を与えたのかどうかは、よくわからない。

混血の子供たちの身体的特徴は非常に多様であるが、かなりの割合の人たちは、わずかに吊り上がった眼、ややウェーブした髪の毛、整った顔つきをしている。多くのブラジル人がそうした特徴を有しているわけで、混血の子供たちはブラジルの中にいるかぎり目立つことはない。そのことは子供たちに安心感を与えているものと思われる。混血の子供は美しいと言われることが多いが、ブラジルでは本当にそう思われているかどうかは確かでない。オリエンタル的な繊細さとブラジルの華やかさが混合した美しさと称える言説は存在するものの、本当の美的基準がどこにあるかは確かでない。⁸¹ そうしたことよりも、今や日系社会をも含めて、混血が広く受け入れられている事実が重要である。

日本では目立つ混血の子供たちは、日本在住中に混血であるが故に差別されたり、不愉快な目にあったりして、悩むことがどの程度あったのだろうか。それに対する、はっきりとした回答は出されていない。しかし、混血の子供たちが日本での交友関係で、日本人の親しい友達をつくっていた例が多いことは、インタビューの合間に知ることができた。

これはペルーから母親と姉とともに小学校高学年の時に日本に行き、高校卒業までを日本で過ごした混血の少年の場合であるが、彼は日本の学校や教師は親切で公正であると考え、友人関係でも極めて楽しい日々であったと述懐している。彼は混血とはいっても、父方の姓も母方の姓もスペイン系ではあるが、何分の一かは日本人の血が入っている。父親はペルーに残り、母親と姉が日本でホテルのメイドをしている状況は、本来、決して恵まれたものでも、幸せなことでもなかったが、母と姉の支持とやさしさが自分に自信を与え、楽天的に、また、外向的になれたと述べている。少年は高校の他に駅前の英語学校に通い、そこで知り合った年上の日本人女性と恋仲になった。極めて充実した青春の日本生活であった。その彼は今ペルーに帰国し父親のところに住んでいる。母と姉は未だ日本で働いている。彼はリマの大学に入ろうとして今、予備校に通っているが、楽天的なものの見方と外向的な性格はそのまま維持しているように思われた。

5. 出稼ぎ経験者の人生設計の中での教育の位置づけ

(1) 社会上昇戦略の中での出稼ぎと教育のディレンマ

もともと、出稼ぎは日系人の社会上昇戦略の一環としてとらえられ、実行された。日本に行って稼いだ資金で自営業者になるという戦略、アパートなどの不動産を買って、そこから、確実に収入を得るといった戦略がそこにはあった。実際には多く的人是期待した通りの資金がたまらず、出稼ぎを繰り返すことになったが、1980年代から90年代にかけてラテンアメリカ諸国を襲った経済危機を前にして、社会上昇期待は失われ、出稼ぎが当面の解決法として登場したわけだが、それぞれの国の社会、経済、教育の長期的な展望の下では、出稼ぎは社会上昇戦略として最初からディレンマを抱えていた。

すなわち、ブラジルを筆頭として他の国においても、社会経済構造がより情報化、ハイテク化していく

中で、新技術への適応能力、高い情報収集処理能力を持つ人材が求められ、高学歴志向が強まっている時に、自国を離れ日本に行くことは、短期的に金儲けにはなるけれど、子供の教育にはマイナスとなり、長期的には家族全体の戦略としては、社会上昇と反対の結果になるのではないかとのディレンマである。子供が日本の教育に適応できず、また、自国に帰ってからも適応できず、新時代が求める教育を受けられなかった人間として、社会の下層に追いやられるのではないかとの危惧、社会上昇を志向して取った行動が家族全体としては長期的に反対の結果になるのではないかとのディレンマがそこにある。

(2) 人生設計の中で教育を真剣に考える人たち

出稼ぎに行く日系人たちは、家族全体の将来の生活改善のためには、子供たちが、どの時期に、どこで、どのような教育を受ければよいのかという問題を真剣に考える必要が生じ、以前にも増して、人生設計をたてる必要に迫られるようになった。筆者がインタビューした人たちの中にも、その問題を真剣に考え、帰国後の再適応に大きな関心を示し、その過程を細かく観察している人たちが相当な数いた。そうした家庭では、江原論文や田島論文が示しているように、子供の帰国後の再適応に際して、同じ教会の信者仲間から助力を仰いだり、子供の文化的ショック（日本の学校に比べて、ブラジルの学校が騒々しく、汚く、また、教室の窓からゴミを捨てることなど）を話を聞くことで和らげたり、親が大きな努力を払っている。

人生設計の中で教育が重要であり、特に、質の良い教育を子供に受けさせる必要をこの人たちは感じている。そのためには、現況においては、質が悪くなった公立学校を見限って、大きな経済的負担を覚悟してでも私立学校に子供を通わせることが親としての努めとなる。かつて、日本人移民の子供は殆ど公立学校で勉強した。その時代、ブラジルもペルーも公立学校の教育は充実していた。筆者たちはリマでフジモリ大統領が卒業した公立のアフォンソ・ウガルテ小中学校を訪ねたが、かつて多くの優れた生徒を生み出したこの学校にも荒廃の波が押し寄せ、予算の欠乏で教材を十分に備えることができない状況であった。今、この学校は売却に付されている。今日、どの国でも公立と私立の間には大きな格差がある。

そのため、子供を私立学校に通わせるために出稼ぎに行く、あるいは出稼ぎを続けるというパターンが生まれ、また、十代終わりの子供たちが、予備校の学費を稼ぐために単身出稼ぎに行くパターンが生まれている。親たちは子供が自国でぶらぶらしているよりは出稼ぎに行き、苦勞して自分で金を稼ぐことが子供の将来にとって良い効果を生むと考え、子供の出稼ぎを、むしろ奨励する。一方では、日本に家族とともに出稼ぎに行っていて、子供が成長するに従い、その子供の教育のために出稼ぎを打ち切って帰国する例が見られる。教育とそれに続く職歴への道は、子供が10歳になる前に決まってしまうと考える親もいるからである。⁹⁾ このように、出稼ぎ経験者のかなりの割合の人にとって、人生設計の中で出稼ぎと教育は密接な関係にあり、教育が重視されているわけである。

(3) 教育軽視の人たち

しかし、他方では、確固とした人生設計を持たない人、ともかく、今、できるだけ多くの金が稼げれば良いと考える人も多い。その人たちの間では、教育の問題は軽視されている。ある場合には教育は不必要とも考えられてる。日本で出稼ぎとして働く時に大卒も中卒も結局、同じ賃金ではないか、あるいは、自国での日系人成功者には学歴がなくても、大金をつかんだ人がいるのではないかとの主張には、確かに説得力がある。ブラジルだけでなく、パラグアイやボリビアでも1980年代後半から大豆栽培を主にして機械化された大規模な農業で大きな収益を上げる日系人農家が増えたが、そうした農家の中にはかつて教育の機会を失っていた人も多かった。そのことは受けた教育と無関係に人は金持ちになれることを如実に立証し、地道な努力で子供の教育にあっていた親たちの信念をゆるがせた。

教育無関心派の親たちは、将来の人生設計を考えたり、子供の教育に金を使うよりは、金をためること

を、また、今すぐ使える金を重視する。そうした考えは親だけでなく、子供の世代にも強い。日本にきている子供たちは十代の終わりで単純労働をすれば、自国で多くの大人がとても手にし得ない大きな金を得ることができ、そこから、教育や技能の取得を軽視する傾向が生まれる。子供たちはこうして稼いだ金を派手に浪費する。

出稼ぎの人たちのかなりの部分の教育への無関心は、筆者たちが行ったアンケート調査にもあらわれている。その人たちにとって、帰国してからの最大の問題は仕事があるかどうか、ある程度の収入が確保できるかどうかであり、アンケートの中の教育に関する諸項目には殆ど無回答である。職業によって教育軽視が決まるわけではないが、教育に関して無回答の人たちは、在日経験5年ないし7年、現在ブラジルではビデオ貸出店で働いている女性、トラック運転手の男性、レストランのウェイターの男性といった人が多い。

また、教育に関して回答した中に、日本の方が子供が外で自由に遊べるし、簡単に友達ができる、それに比べるとブラジルでは、外は危なくて子供を勝手に遊ばすことはできないし、親が子供をあちこちに連れて行かねばならない、親が子供のために費やす時間と労力は、はるかに大きく大変であると回答したのがいくつかある。そこに述べられていることは確かに事実であるが、その回答には、できれば日本のように教育は学校に一任したい、帰国し、生き残りに追われている今は、子供の教育のために費やす時間も金も最小限にしたいとの姿勢が見てとられる。

以上のような教育軽視の家庭では、子供たちが十分な教育、質の良い教育を受けないままに終わってしまう、到来しつつある情報化、ハイテクの時代に取り残されてしまう可能性がある。今日、日系社会が階層分化しつつあることを、技能も生産手段も持たない人と、それを持つ人に分化し、かつ共存する状況が生まれていることを研究者は指摘する。これという長期の人生設計もなく、子供の教育のことを考えない上記の人たちとその子供たちには、どのような未来が待っているのだろうか。社会の底辺に追いやられるのだろうか、それとも、彼らが考えているような、教育は少なくとも大金はつかめる、学歴と無関係に成功者への道は開かれている状態が未来にも保証されるのであろうか。

6. 二言語・二文化状況への対応

(1) 集団移住地日系人とその子供たちの二言語・二文化への対応

ブラジル、ペルーをはじめとして、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビアで長年にわたって日系人の子供たちは日本語と現地語、祖先から継承した日本文化と現地の文化という二言語・二文化の間を揺れ動きながら、自己形成をする経験を重ねてきた。筆者は1990年3～4月、1992年10月、1993年5月にブラジル（グアタバラ）、アルゼンチン（ラプラタ）、パラグアイ（イグアス、ピラポ、フラム、チャベス）、ボリビア（サンファン、オキナワ）の戦後集団移住地を訪ね、そこでの移住者の子供たちの教育の調査を行ったが、その中で、日本語とホスト社会の言語との二言語併用教育問題と、日本的倫理とホスト社会の支配的価値観との相克と調和の問題は特に重要であった。¹⁰⁾

そうした集団移住地では、日系人の子供たちは空間的にはひとところにとどまっていながら、自分を取り巻いている二言語と二文化の間を動きながら自己形成を行っていた。日本の経済発展が明らかになり、ホスト社会での日本のプラス・イメージが定着し始める1970年代後半以後、移住地の日系人の子供たちは、自分が本当に訪ねる機会があるかどうかともわからない日本、父母や祖父母が語る、清く、正しく、美しい日本に関して誇りを感じ、その言語、日本語を学ぶことに大きな意義を見だし、日系人の子供どうしで付き合うことに、やすらぎを覚えていた。そのお互いのやすらぎを支えているのが、祖先から伝承された

日本的な感じ方、考え方であると子供たちは思っていた。

子供たちの間で、また、その父母たちの間で二言語・二文化状況への対応の仕方は多様であった。しかし、集団移住地で多くの場合に見いだされたのは、幼児、家庭内で日本語を通じて言語的認識・分析の思考力を発達させ、幼稚園あるいは小学校に入ってから現地語に接し、それを学習し、当初、現地語による学力に遅れが生ずるが、高校入学時まで十分に遅れを取り戻し、現地語による高い理解・表現力を身につけ、現地の学校ですぐれた成績をおさめるという例であった。

その結果として、これら移住地の子供たちの高い割合が、日本語学習と現地語学習の双方を肯定し、価値観に関しても、日本的なものと同地的なもの双方に理解を示そうとする傾向があった。もちろん、幾つもの例外はあり、日本語、現地語ともいいかげんな学習しか行えず、言語的な思考力が十分に発達せず、中学や高校で学習困難に陥る例、その結果としてドロップアウトする例も見いだされたが、主たる傾向は二言語、二文化を肯定し、それを受けての十分な学力の達成であった。

こうした構図に1980年代後半から変化が現れた。一つには家庭内での日本語の使用がやや低下し、現地的価値観がより浸透したことである。さらに第5節で見たように、大豆栽培の成功で教育と無関係に大金持ちになるものが輩出し、それまで地道な努力で子供の教育に当たっていた親たちの信念を揺るがせた。そして、こうした変化を加速したのが出稼ぎ現象であった。

しかし、共同研究者の田島が後に行った調査では、筆者が先に述べた諸条件に基本的な変化は起きていない。すなわち、家庭内では日本語がスペイン語に先行し、日本語を通じて言語的認識・分析の思考力をつけ、学校進学によってスペイン語の力をつけ、最終的に両者を習得し、必要な水準にまで高めていくという過程に変化はない。家庭内で日本の音楽を聴き、日本のビデオを見る機会は90年代に入ってむしろ増大しているし、日本語教育には相変わらず、継承語教育として文化伝統や情操教育が加味されている。¹¹⁾

(2) 出稼ぎ経験者とその子供たちの二言語・二文化への対応

一方、1998年、99年に筆者がインタビューした家庭の状況は集団移住地の裏返しになる。交婚家庭はもちろんであるが、純日系の家庭の大半も、家庭内での使用言語は自国語、すなわちポルトガル語（ブラジル）、スペイン語（その他の国）であり、日本語がそれに介在することは少なかった。子供たちは自国語で育った。この後に日本への出稼ぎがくるわけで、日本に行っても当初は、家庭内で自国語を話していたのが、年月を経るに従って子供たちは日本語を家庭内に持ち込むようになり、やがて、子供どうしは日本語で話すようになる。それに伴って自国語の忘失がはじまり、親子のコミュニケーションが不充分になってくる。日本における出稼ぎ家庭での言語使用と言語習得については、川口円子氏の浜松市のブラジル人居住者に関する研究の中で示されている。¹²⁾

自国語の忘失が重要な問題となり、さらに帰国後は自国語での学習に追いつくことに最大の関心が移り、その中で日本語の存在、その維持は二次的となる。子供たちの日本語能力は、その在日年数、おかれた環境に応じて相当に開きがあるが、日本で生活するのに必要最小限の日本語は習得しているものが大半であり、帰国後それをいかに維持するかが一つの問題となる。日本語は役に立つ言葉なのでぜひ維持したい、あるいは、日本語をちゃんと話せば仕事に就くのに有利など学習に強い動機が与えられているが、実際に日本語学習を維持する機会は限定され、学習に割く時間も限られ、多くの在日経験の子供たちが、望んでいながら学習継続を果たせないでいる。

しかし、彼らは一時期には高い日本語能力を身につけたわけであり、その帰国時の年齢にもよるが、日本語を終生維持していく可能性はある。また、彼らの日本文化の理解は断片的であっても、日本の若い人たちの生きた文化と生活を経験した人が多いわけで、これも大きな資産であるといわざるを得ない。従来、

ブラジル、ペルーをはじめラテンアメリカ諸国では日本人ないしは純血日系人で日本語が話せ、日本的伝統を身近に感じつつ育った人たちによって、日本語、日本文化と、あるいは日本を起源としながら現地の影響をも取り入れて発達した日系文化の、継承と発展が図られてきた。そんなところへ、本来、日本語も話せず、日本文化の継承の機会にも恵まれなかった人たちが大挙して日本に行き、数年間あるいはそれ以上の在日経験を積んで、帰国しているわけである。その中には流暢な日本語を話すようになっている人、日本文化のある側面を熱狂的に愛している人もいる。この人たちが、それぞれの国での日本語の維持、日本文化、日系文化の継承や発展に、どのような役割を果たすのか、あるいは果たし得ないのかは今後、注目されるべき現象である。

1) 国外就労者情報援護センター (CIATE)、『出稼ぎに関するアンケート調査結果』サンパウロ、1999年12月、17～18ページ。

2) Satomi Takano Kitahara, "Dekasseguis - os Novos Gaijins : Uma Análise da Identidade e da Estratégia de Ascensão Sócio-econômica dos Nipo-brasileiros", ブラジリア大学社会学研究科に提出された博士論文、1999年6月、Agradecimentos 及び p.128.

3) Kitahara, *op. cit.*, p.88.

4) Audrey Maxwell, "Not all issues are Black and White," in Rosemary Breger & Rosanna Hill (eds.), *Cross-Cultural Marriage: Identity and Choice*, Oxford : Berg, 1998, p.126.

5) 田島久歳「日系パラグアイ人の子どもの『日本人』アイデンティティ」『ラテンアメリカ・レポート』1999年、Vol. 16, No.2, アジア経済研究所、20ページ。

6) Kazuo Watanabe, "Futuro da comunidade Nikkei brasileira," *Revista USP*, (27) :20-30, setembro/novembro, 1995, pp.22-23.

7) 筆者がインタビューしたのとは別にロンドリーナの日系人会の雑誌 *Jornal ACEL* が行った交婚家庭へのインタビューでも同様のことが強調されている。*Jornal ACEL*, no.11-ano 1-junho, 1999, pp.4-5.

8) *Paraná Shimbun, Jornal dos paranaenses*, Londrina, 21 de agosto de 1999, pp.10-11.

9) Kitahara, *op. cit.*, p.226; p.233.

10) 中川文雄、国本伊代、伊藤京子『パラグアイ及びボリビアの戦後集団移住地における子弟教育』国際協力事業団、1990年10月、26～40ページ。

11) 田島前掲論文、19～20ページ。

12) 川口円子「日系ブラジル人子弟と学校教育」『わが国の国際化に伴う文化的・階層的摩擦と受容体制の社会学的調査研究』平成6～8年度科研費（基盤研究B）報告書（代表者、間庭充幸）静岡大学人文学部、1997年3月、26～30ページ。